

史遊会通信

No.244号
平成27年
7月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

六月講演要旨

歴史の裏話し（真相？）

三戸 岡道夫

一、秀吉はなぜ関白になれたのか？

天正十年（一五八二）この本能寺の変によって織田信長はこの世から去り、秀吉がその後をついで政権を握った。政権を握ったからには何か権力のポジションが欲しいと、征夷大將軍の職を朝廷に申請した。しかし征夷大將軍は武家の棟梁であるから、武家でなくてはならず、尾張中村の百姓の出身者では駄目だということ断わられてしまった。

しかし、しばらくすると、征夷大將軍は駄目であるが関白ならいいという、驚くべき返事が来た。そこで秀吉は天正十三年に関白となり、翌年天正十四年に豊臣の姓を賜り、太

政大臣となり、関白太政大臣豊臣秀吉と位人臣を極めたのである。

これは事実であるから間違いないが、よく考えるとおかしい点が一つある。それは征夷大將軍にもなれなかった者が、どうして関白になれたかということである。関白は征夷大將軍などよりずっと位が高い上に、武家どころか、公家出身でなくてはならず、その公家でも藤原氏出身の五摂家（近衛、鷹司、一条、二条、九条）でないと成れない地位であった。征夷大將軍にもなれなかった秀吉が、なれるはずがない。

どこか、おかしい。蔭で何かの力が動いたのである。蔭の力、それは徳川家康である。

例会のお知らせ

◎ 七月例会

日時 平成二十七年七月二十二日（水）
午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 前田 速夫氏（外部講師）

テーマ 白山信仰の謎とエミシの神

九月号自由執筆 太田精一、森下征二、

佐藤健一の諸氏 締切八月末

◎ 九月例会

日時 平成二十七年九月二十三日（火）

午後三時～五時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 隆 恵氏

テーマ 蘇我倉家の一族

十月号自由執筆 村上邦治、漆原直子、

諸橋奏の諸氏 締切九月末

秀吉が天下を狙ったように、家康も狙っていた。だから秀吉が征夷大將軍になり、豊臣幕府が出来ては、家康が困るのである。幕府は組織であるから、秀吉が死んでも組織は残る。二代目將軍は秀吉の血筋へと引継がれていって、家康が介入する余地がない。そこで家康は裏から朝廷に手を廻し、秀吉が征夷大將軍になるのを必死にストップさせたのだと思われる。しかし関白は一代限りであるから家康は認めたのである。

秀吉が死ぬと関ヶ原合戦に勝利した家康は、慶長八年(一六〇三)に徳川幕府を設立したのは歴史の示す通りであり、家康は二十年も前からその先を考えて政治裏活動もした、長期政権政治家だったのである。

二、千利休はなぜ切腹したのか？

現代の茶道、表千家、裏千家の家元である千利休は、茶道の師として秀吉に仕えたが、七十歳のとき秀吉に命じられ、切腹した。

なぜ切腹を命じられたかという点、大徳寺の山門の中に利休の木像を設置した。その山門は、寺に入る時に秀吉もくぐるので、秀吉の頭の上に利休の像があるとは不敬であるか

ら切腹させられたとか、その他、諸説いろいろあるが、真相は語られていない。

秀吉が茶道に力を入れたのは、茶道を極めようとかいう、文化的なものではない。自分の権勢の飾り物にすぎないのである。秀吉は関白となり位人臣を極めたが、百姓出の秀吉には文化教養がまったく無い。それで武政もあるけれど、文政もあるのだという面を強調し、世間にPRしたのであった。そのため信長も使った千利休を茶道の師として、秀吉にも文化の力があるように飾り立てていたのであった。

しかし秀吉の茶道と千利休の茶道とは、方向が逆であった。秀吉の茶道は黄金の茶室を作るというような豪華絢爛な派手なものであったが、千利休の茶道はその逆の、わび・さびの精神性を追求する「わび茶」であった。従って千利休の造る茶室は、黄金の茶室の逆の、二畳の茶室といった虚飾を一切取り払ったものであった。

すなわち、千利休は秀吉に文政面で仕えている以上、表面上は従っているけれども、本質的には従っていないのだった。それが秀吉には許せなかった。一度、利休をとっちめてやらなくてはならない。しかし、どうしても利休は秀吉にあやまろうとはしないのだった。

(切腹を命ずれば、あやまってくるだろう) 秀吉は最後の切り札を出したのであるが、利休はあやまろうとはせず、切腹してしまっただけである。

なぜ利休は切腹してしまっただのか。それは利休が、秀吉の嫌いなわび茶を迫及していたのは、秀吉の政治への忠告であるからであった。

秀吉は天下をとったけれども、そこに展開しているものは天下の富を一手に集めて、大坂城を造り、聚楽第を作り、美女を集めて淀城を造り、黄金の茶室の茶道を自慢するといった、権勢を誇る豪華絢爛きんきらきん政治であった。しかし千利休は、

(天下を治めるといふのは、そういう政治では駄目である。民への思いやりのある仁の政治でなくてはならない)

ということを、政治論としてではなく、「わび茶」という茶道を通して秀吉に忠告していたのである。

利休の切腹は、秀吉に言われたから切腹したのではなく、諫言の切腹だったのである。

三、家康はなぜ江戸に幕府を開いたのか

家康は幕府を作るなら、京都ではなく、江戸だとひそかに考えていた。

幕府を京都に作ると、足利幕府のように將軍をはじめ家臣たちも、朝廷にならって公家のようになくなってしまい、武力を失って、亡びてしまう。幕府を作らなくてもかつての平家も、京都に本拠を置いたので、平家の公達きんたちといわれて公家化してしまつて、そして亡びた。

幕府を作るなら西ではなく、東である。しかし東といっても、鎌倉幕府のような鎌倉ではなく、江戸である。鎌倉には港がなく、後背地がない。用心堅固であるが、発展性が無い。江戸はその頃は未開地であるが、江戸湾の中にあつて良港があり、背後に関東平野が広がっていて、発展性がある。

その頃の家康は、出身の三河をはじめ、駿河、遠江、甲斐、信濃と、五カ国を領していたが、ひそかに江戸をも狙つていたのである。

天正十年(一五九〇)になると秀吉の天下統一もほぼ最終段階となり、従わないのは小田原の北条氏のみとなった。そこで小田原城が落ちれば秀吉の天下統一は完了する。そうなると、家康が、三河、駿河、遠江、甲斐、信濃を領しているのが邪魔になる。家康をもつ

と東の方へ追い払いたいと、秀吉は考えていた。

小田原城攻撃の最中、秀吉は家康をつれて小田原城を見下す砦に登ると、東の方を指さして、

「これでいよいよ天下も統一じゃ。東の広い方も治めねばならぬが、それをそちに任せよう」

と言つたのである。すなわち秀吉は、家康を関東地方へ追い払おうとしたのである。

しかしこれは江戸を狙つていた家康の思う壺であつた。しかし家康はそんな気持ちをそぶりにも見せず、

「ありがたくお受けいたします」

と敬服して命令を受け、腹の底ではにんまりと赤い舌を出していたのである。

かねて関東を狙つていた家康は、地方巧者じかたうしやの伊奈忠次に命じて、関東地方の地勢を至急調べさせた。この時の伊奈忠次は四十一歳の働き盛りで、三河時代から家康に仕えて、民政力にすぐれた、家康のもっとも信用する家臣であつた。地方巧者とは、戦争時にあつては食糧の確保、その運搬、また川に橋を架け、砦を築くなど、戦争の支援作業に当り、平時には、耕地整理、新田開発、堤防作りなどの

治山治水事業などの民政事業のベテランの者である。

忠次はただちに、三、四名の有力な部下をつれて、関東へ向つた。そして、広い武蔵野の開発の可能性、キポイントは利根川のコントロールにあること、そして江戸の地形を俯瞰的に観察して、台地を削つて日比谷入江などに埋めれば、幕府の拠点にふさわしい街になる可能性などを報告した。

家康はその報告に従い、天正十八年七月五日に小田原城が落城すると、はやくも八月一日には勢揃いして江戸に入り、そのような早い行動に人々は驚き、そして秀吉を喜ばせた。そして関東郡代という、関東地方全体を一元的に管理する組織を作つて、そのトップに忠次を据え、関東地方全体の民政を忠次に任せた(軍政は家康が握つている)。慶長三年に秀吉が死すと、関ヶ原の戦いを経て、慶長八年に家康は江戸に幕府を開いたのである。天正十一年に秀吉の幕府設立をストップさせて以後、二十年にして家康は自分の幕府確立という長期計画を実現したのである。

(終)

自由原稿

薬師寺東塔の規尺は非唐尺？

高橋 正彦

【緒論】 一 本会の行方如何？ 一

先月例会後、ある方より、小説主体の立場から、「私の論調は数字が多く、難しく解り難い(不適か)」との御指摘があった。これに対し、「本論の趣旨」を併せ問題提起します。

●地位なき者が論を述べる必須要件は、世に残る獨創性であり、是無き主張(無為な自己満足)は無残に消滅する命運にある●

一 是は學術・文学・芸術を問わず認められる、普遍的要件と思われるー

①但し「獨創的」着想は膨大な岩盤の切出し(機械的抽象)を要し、徒手空拳(安直な連想)では希物(獨創的な成果)は得られない。

② 因みに現代的特色として、岩盤(基礎的原情報)はテクノクラートが占有し、誤った事実を大衆に見せている可能性があり、

③ 茲から真実を世に顕露せしめるには

●情報の強靱な取捨、その手続きを世に納得させる獨創的論理ーが必要である。

④ 処で、この論理手続きには演繹的手法と、帰納的手法の二種がある。(前者を嚴密な情報処理に寄らない諸前提に基づく旧来の推論法、後者を嚴密な情報処理による現代科学的な推論、と漸定的に仮称する。)

【中間的要約】

旧来の立論は前者的(嚴密科学的に完結している諸前提に基づかない)推論であるが、現代の諸問題に直面して、この類の思考法では判断能力の限界にあるかに見える。

● 例えば現代は温暖化過程と確言できるか

● 三・一一震災の一年或いは二年以内の同様激震ありと公言した権威、に対し適切な批判が出来たかー等々問題を暗黙に提示した。この様な危機的状况において、古代文学のみを是とする発想等への停滞は許されず、

● 大衆レベルから、膨大な情報に紛れた真実を選別、見抜く発想の轉換が求められる。

その様な多様・難解なデータを取廻す例を幾つか提示した。(年輪・湖沼堆積データ等下記の数値解釈もその一例に加える。

【古代史上の新たな視点Ⅱ尺度論】

① 要約… 当会の新井先生の「提示の如く、古代尺度論は本邦古代国家の成立に関する未知の重要な情報を提示する可能性がある。

但し、その素データの事態が不明瞭…論者多岐…内容が難解等で全貌の收拾がつかない。

然るに天平尺と思われた明瞭データの【薬師寺東塔が天平尺ではない疑義が、茲に明らかとなった】(一尺Ⅱ二十六・三cm)。

【ここから次の事実が明らかとなった】

● 古韓尺の事実は根深い存在とみられる。

● その古い形態は一尺二十六・六cmより小さい。

柱間寸法を解釈する時に、

端数説(注)と完数説の二説…があるが、

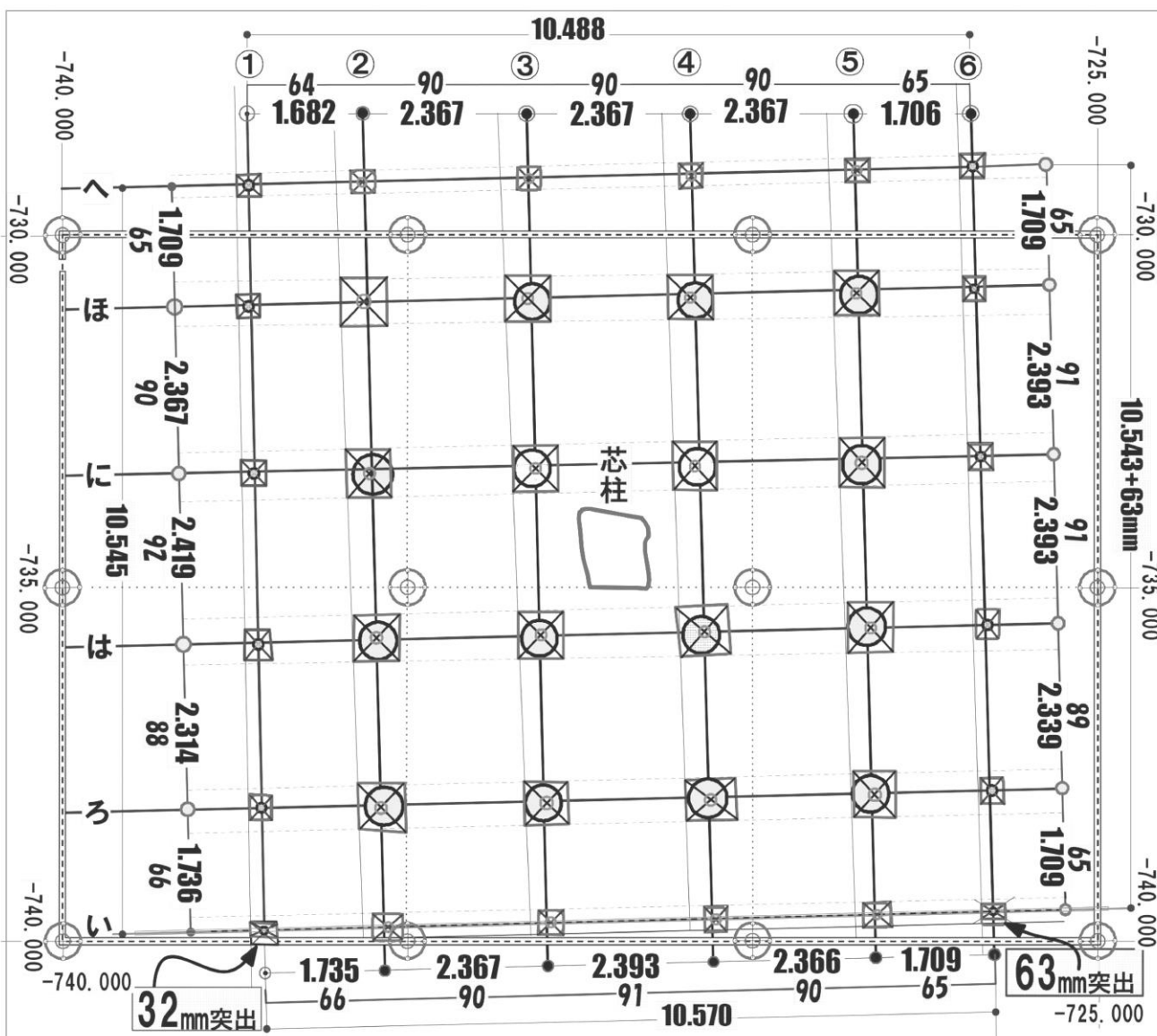
● 薬師寺東塔の柱間値は完数説を支持する。

● 右は従来の曖昧な尺度論に光を与える。

(注) 端数とは半端な小数値を意味する。端数説とは垂木から隣の垂木に至る幅を一位(一尺)とし、是を全ての建築企画の寸法の基準とする設計法(本邦中世以降に特有)を仮称したもの。一尺は無制限小数を取る。最新の説(溝口明則説)は法隆寺の企画を「校割法」類似の説で解釈している。

② データの現況… 東塔は平成二十一年より解体修理に入り、二〇一五年の上物解体後に地盤面の発掘調査図が公開された。図には公共座標測量値が示されているので、CAD

図面により原図の礎石の位置関係がmm単位で



薬師寺地盤面発掘調査図：図 \square は公共座標グリッド線/5m間隔。是により礎石配置図面のmm単位の正確な復元(CAD図面化=本図)が可能となる。元図=礎石彩色、の最上面の輪郭をトレースで示した。礎石に残る柱の輪郭(楕円)は、全て円形で略示した。(図の距離・座標はm単位少数下第3位表示)

正確に復元できる。(原図：薬師寺東塔発掘調査の現説資料：奈良文化財研究所他)

③データの解析：礎石は全て矩形であり、この各対角線の交点を礎石の中心とした。

次いで、い・への行、①⑥の列を細線で結ぶ。これ等は微小誤差で直線を成し、企図された基準外周線である。(但し、下端線のみは両端が32と63mm突出するので、内側の礎石4点の中心を基準線とする)

④結果—外周線礎石間の距離/0.263m

(古韓尺による寸単位の柱間値)

縦(65-90-92-88-66)(65-91-91-89-65)

横(64-90-90-90-65)(66-90-91-90-65)

具体的には： $\sqrt{65 \cdot 709 / 0.263} = 6.4981$ 尺

≠65.0寸 (図中の66等の数値は少数以下を四捨五入した「寸」換算値)

⑤右結果の補正例を左に示す

縦(65-90-91-90-65)(65-90-91-90-65)

横(64-90-90-90-65)(66-90-91-90-65)

これは柱間距離の基本は【65-90-91-90-65】

とするものの、実際の柱芯位置は一寸単位で移動する事を示す。或は、①・②列間の幅に関して、明らかに上端は一寸短く下端は一寸長い施工ミスがある。

⑥余の尺度候補(=X)への適合度の判定

(原データ＝Y:に対すY/X寸換算四捨五入値の差)

【Y=1.709と例示】Y/0.263=64.981寸≠65.0寸に対し0.5mmの誤差、然るに、Y/0.296(唐尺)=57.736寸≠58寸【8mmの誤差】

…【結果として唐尺は合わない】

右は尺度の合致・非合致を判定する計算過程の一例を摘示した。

但し実際は、

●上下・左右端の計十種データに対し、

●漢尺二二〇mm〜高麗尺三六〇mmの百四十通の割り算(計千四百回)を行い、誤差【3mm内】の具体例を抽出し、度数分布を作成した。

——このマクロ計算の結果——

【唐尺・高麗尺は適合しない】、【古韓尺の適合度が高い】事が明示される。(委細省略)

【結 論】

古代尺度論に見る様に、精密なデータがない、或は粗い諸元に依拠する(＝原情報が曖昧、或いは秘匿された)「推論」では真実が見えず、是に對して大量の「原典」情報を、精密に調整し「通観」する事により、拙い(公衆的)視野の中に真実が顕現する場合がある。

——右の帰納的(?)な探究法以外に、真実を知る方法があれば明跡をお示し下さい。

——さもないと存在の痕跡は霧散に帰す。

高橋正彦氏の論考へのコメント

新井 宏

私の提唱している「古韓尺」に一致するという興味深い論考なので、わたくしが二十五ほど前に開発した「尺度解析プログラム」に高橋氏の作成した数値資料を入力してみた。私のプログラムも基本的には、高橋氏の考え方と良く似ているからである。

ただし、入力は、同一の柱間は平均値を利用、その他に主屋の一辺長、裳階の一辺長を採用した。

主屋三間(12資料)平均値 二・三七一
裳階巾(8資料) 平均値 一・七一二
主屋一辺長 七・一一三
裳階一辺長 一〇・五三七

その結果、抽出された「候補」は二六・二で、高橋氏の二六・三とほぼ同一の結論である。ただし、発掘調査報告書には、基壇巾を一三・二〜一三・四としていたのでこれも解析に加えると、二六・二の他に二九・四の「候補」を抽出する。

天平尺の二九・七としてはやや短いとその範疇には入る。薬師寺の金堂が、天平尺で造られていることを考慮すると、天平尺(唐尺)である可能性を否定してしまうことにはできないように思う。

七月外部講師講演予告

白山信仰の謎とエミシの神

前田 速夫氏

白山信仰には、さまざまな興味深い謎があります。今回は、エミシの宗教について考えるなかで白山信仰との接点を探り、オシラサマや白比丘尼の源流は大陸にあり、北方からのルートで東北地方に伝播したとの仮説的な問題提起ができればと考えています。

講師プロフィール

民俗研究者。元「新潮」編集長。著書に『異界歷程』(晶文社)『余多歩き 菊池山哉の人と学問』(同、読売文学賞)『白の民俗学へ』『白山信仰の謎と被差別部落』(河出書房新社)『古典遊歴』(平凡社)『辺土歷程』(アーツアンドクラフツ)『海を渡った白山信仰』(現代書館)、共著に『渡来の原郷』(同) 編著に『日本原住民と被差別部落』(河出書房新社)『鳥居龍蔵 日本人の起源を探る旅』(アーツアンドクラフツ)がある。えみし学会会員。

自由執筆

ある交通事故

宇野 正雄

悲惨な交通事故の報道に接するたびに思い出すことがある。それは私が在ケニア大使館に書記官として勤務していた約四十年前の出来事である。週末の午後二時頃、自宅にH書記官から電話が入った。

「サファリ旅行中の日本人の若者四人が交通事故に遭ったようだ。至急現場へ行って彼の所在を確認して欲しい」。

当日、事故に遭った彼らはレンタカーでナイロビ郊外のフラミンゴの大群生地で有名なナクル湖へ向っていたらしい。その途中、スクールに遭った。当地のスクールはバケツをひっくり返したような豪雨になることが多い、私も四、五メートル先が見えなくなる体験を何度もしている。彼らはスピードを出し過ぎていたのか、スリップした車が対向車線にはみ出し、運悪く向いから来たダンプカーに激突したらしい。

書記官のNさんと一緒に現場に着いた時、道端に放置された車（トヨタカローラ）を見て息を飲んだ。あたかも圧搾機で押しつぶさ

れた鉄クズの塊で車の全長が三分の一になっていた。そこには人影は無かった。それから深夜に及ぶ遺体探索が、色彩、湿度に臭気も加わって今も鮮明に想い出される。

ほどなく分かったことは全員が即死で一遺体が夜八時頃になっても所在不明のまま。「シテイ・モーチュアリー（死体置場）へ行ってみては？」とある病院の受付嬢が言った。時は夜十時を過ぎており、夕食はとっていないかったが空腹感はなかった。

その死体置場は市の郊外の森の中にあった。小雨煙る中、電燈の薄明かりに平屋レンガ造りの建物が浮かんでいた。入口ドアをノックすると「何の御用で？」としわがれ声のカンテラを下げた小柄なせむしの老人が出て来た。まるで自分が怪奇映画の一場面の中に溶け込んだかのような錯覚を覚えた。

「今日午後、ここに運ばれた日本人を知らないか」。

その老人に建物の中へ案内される。異臭が鼻をついた。中には四段重ねのブリキ製の行李が並べられていた。その数、約三〇個。その一つを引き出した。黒人の死体が白い眼を剥いていた。

「違う」、「これか?」、「違う」、を四回繰り返した後、「これだ」と老人。

ガタン！と音を立てて引き出されたキャビネットから遺体の頭部が勢いよく飛び出した。思わずギョッ！と後ずさりした。

当時はヒッピー全盛期で、長髪は肩より長く、それに髭ぼうぼうの若者の顔、首、頭髪に赤黒い血のりがベツトリ。老人がサーピスのつもりか、「ルックー」とヒモで縛られたジーンズの足首を持ち上げニヤリと笑った。それはまるで綿入れ人形の足だった。足の骨が激しい衝撃で粉々になったらしい。思わず山田の案山子を連想した。

自宅へ帰り着いた時は午前二時を過ぎていた。シャワーを浴び床に就いたが生々しい光景が頭の中をグルグル回り、死臭が鼻に残って、殆んど眠れなかった。四遺体は翌日午後には火葬場に隣接する別の場所に集められた。当時、ナイロビに「送り人」がいたとは思えないが、案山子君には誰かの手で血のりは洗われ、心ばかりの死化粧が施されていた。

後部座席にいたとみられる若者は上半身への衝撃が避けられたためか、死後、丸一日経っていたが顔は無傷で風呂上りのような血色が残っていて、ホッペを叩けば今にも目を覚ましそうだった。大使館では遺族への連絡や渡航ビザの発給等を急いだが、ケニアは日本からは地球の裏側に位置し、ナイロビへは飛

行機の直行便が無いこともあり丸一日を要した。遺族の現地到着は事故後一週間経っていた。

その間に凶らずも連日遺体を見守ることになった。ナイロビは赤道近くの高地に位置するため一年を通して冬の無い軽井沢の気候である。その条件下でも防腐処理をせず放置すると死人の腐敗はどう進行するか？

死後三日目からポツポツ黒い斑点が出始める。黒点は日毎に幾何級数的に増えて一週間後にはほぼ真っ黒になる。腐ったバナナの皮そっくりだが死体の皮膚の黒変はバナナより何倍も速い。

それは死亡後、丸一日経っても風呂上り顔だった青年として例外ではない。遺族全員が揃った日の夜、大使館は公邸で通夜の場を設けた。

夕餐の後、「誰が車を運転していたの？」。遺族の一人の母親が食後のお茶の時間に押し殺すような小声で私に向かって聞いてきた。運転席には誰がいたのか？私と同僚の書記官だけが車の壊れ具合と遺体の損傷状態を見て分かっていたのだがそれには応えなかった。遺族が帰国後に責任追及を始め、裁判沙汰に発展することは悲劇を増幅させる結果になり

かねない。それは死去した若者達の本意でもなからうと思ったからである。

翌日、どこからか、黄色の袈裟姿のお坊さん風の日本人が現れ、線香があげられ、短い経が唱えられた後、遺体はダビに付された。

遺骨は大使館が手配した陶器製の壺（日本のそれより大きく趣も異なっていた）に入れられ、骨壺に入りきらなかった遺灰はチリトリで集められ、火葬場の外の雑木林の端に捨てられた。それは遺族の目前で行われた。そのデリカシーの無さは日本では考えられない。それまで涙を見せず気丈に振る舞っていた案山子君の兄さんが庭の片隅で突然、堰を切ったように声をあげて泣いた。私も思わずもらい泣きした。

後日、間接的に聞いた話だが、その方は新宿で弟とレストランを経営する夢があり、それを実現させる矢先の事故だったとのことであった。

一週間前には生身だった人が灰に、それもその一部が日本からは遠いアフリカの土に帰ってしまったのだ。人の命の儚さと、異国で貴重な人生を一瞬にして失った若者達の無念さを想い、あらためて冥福を祈りたい。合掌。

幹事からのお知らせ

一、九月の例会開催日

今年の九月から、例会開催は原則として、毎月第3土曜日の午前10時～12時といたしました。会場予約が予想外に困難で、今度の九月例会は、九月二十三日(水)の午後三時～五時となります。お間違えのないようお願いいたします。

二、史遊会通信 A4版の件

二四三号では、印字を大きくするため、初めての試みとして、A4版でお届けいたしました。如何だったでしょうか。ただし、今後はご希望の方のみにA4版でお届けいたします。幹事までお申し出下さい。

通信二四三号の修正ミスの件

柴田弘武氏の「中将姫伝説と水銀」の六頁上段七行目に：去年じゅう川：とあるのは：去年(こ)川：の修正ミス。

千坂精一氏の「故郷の空」の十頁上段二行目に：沁：とあるのは：『故郷の空』と題した詩をつけたのは本校の：の一行欠落分。いずれもワードの操作ミスなのですが、理由が判然としません。二四三号はA4版で発行しましたが、保管のため従来版を希望される方も居られるので、お詫びを兼ねて、修正版を一緒にお送りします。